

令和5年7月26日

文教厚生常任委員会

委員長 綾城 美佳 様

文教厚生常任委員 江原 健二

文教厚生常任委員会行政視察報告書

下記の日程で行政視察を実施しましたので、別紙のとおり報告します。

記

1. 視察期日及び視察先

令和5年 7月11日（火） 北九州子どもの村小・中学校（学校法人きのくに子どもの村学園）
「公教育のあり方について」

2. 視察参加名簿

委員長 綾城 美佳
副委員長 米弥 又由
委員 林 哲也
委員 岩藤 睦子
委員 中平 裕二
委員 上田 啓二
委員 江原 健二
委員 ひさなが 信也

以上8名

3. 視察報告・所感 別紙

(別紙)

視察先	北九州子どもの村小・中学校 (学校法人きのくに子どもの村学園)			
視察日時	令和 5 年 7 月 11 日 10:30~12:00			
視察項目	公教育のあり方について			
対応部署名	北九州子どもの村中学校 (校長 高木秀実)			
学園概要	学園長	堀 信一郎	小学校	和歌山県、福井県、福岡県、山梨県、長崎県の5か所
	中学校	和歌山県、福井県、福岡県、山梨県、長崎県の5か所	高等専修学校	和歌山県の1か所
	会発足	1984年9月	学年定員	10名~20名
	<p>学校法人「きのくに子どもの村学園」は、1992年に和歌山県で誕生した文部科学省認可の私立学校です。子どもの入学定員は、1学年10名から20名で、学校の実情に応じて異なりますが、10か所で600人あまりです。</p> <p>子どもたちは、教育目標や基本方針、授業（プロジェクト、自由選択・ミーティング、基礎学習）に添って、のびのびとした教育のもと自由闊達に教育活動を行っています。</p> <p>堀真一郎学園長は、「たのしいから学校。たのしくなければ、学校じゃない。」というフレーズで全国の子どもたちや保護者に呼び掛けています。そして、山の中の学校だが、見学や旅行も多く、修学旅行や海外研修も企画して、日本や世界に目を向けた学校で、日本でいちばんたのしい学校、それが「きのくに子どもの村学園」と紹介しておられます。</p>			
視察内容				
<p>長門市議会の文教厚生常任委員会では、議会閉会中の所管事務調査を実施することになる。調査項目は「公教育のあり方について」で、その一環として、学校法人きのくに子どもの村学園の一つである北九州子どもの村小・中学校を視察研修しましたので、その内容を簡単に報告します。</p>		 <p style="text-align: center;">【正門の風景】</p>		
 <p style="text-align: center;">【校舎の風景】</p>		<p>訪問することになったのは、きのくに子どもの村学園を舞台にした映画「夢見る学校」を視聴したことがきっかけです。子どもは、そもそも好奇心旺盛なもので、幼少時より大自然の中で遊び、生活体験や勤労体験を中心とした活動は子どものやる気に繋がるものです。こうしたことを教育活動に取り込み、一定の成果を収めております。</p>		

きのくに子どもの村学園が示す「教育目標や基本方針、授業についての取組状況」は次のような内容です。

【教育目標】

「自由な子ども」・・・感情、知性、人間関係のいずれの面でも自由な子どもに育ててほしいと願っています。

■感情面の自由

無意識の中に秘められた不安、緊張、自己否定感などから解放され、情緒が生き生きと躍動すると同時に、自己意識がしっかりしていて、しかも自信と自己肯定感をもって生きる子になって欲しい。

■知性の自由

既成の知識や技術を受け身的に習得するのではなく、生活の中から見つけた具体的な課題に取り組み、知識や技術を創造する体験を積み重ねて、知的探求の態度と力を伸ばして欲しい。

■人間関係の自由

徳目主義の上からの道徳教育によってではなく、心理的に自立した個人として、みんなと目標を共有し、役割を分担して問題を解決する体験に参加して、共に生きる喜びを味わい、人間関係の術（すべ）を学んで欲しい。

【基本方針】

■自己決定の原則

◆子どもがいろいろなことを決めます。

学習計画や行事の立案が子どもと大人の話し合いで決まります。自分の入るクラスが選べます。クラスミーティング、寮のミーティング、そして全校集会など、話し合いのとても多い学校です。

■個性化の原則

◆一人ひとりの違いや興味が大事にされます。

個性や個人差を尊重します。年齢が同じだからといって、同じことを同じ方法で、同じペースで、同じ答えに向かって学習するわけではありません、広い範囲のさまざまな学習や活動が選べます。

■体験学習の原則

◆直接体験や実際生活が学習の中心になっています。

本やドリルの勉強よりも、実際に作ったり調べたりする活動が重視され、「プロジェクト」と呼ばれて時間割の半分を占めています。クラスはプロジェクトのテーマによってつくられ、子どもは好きなところを選んで所属します。

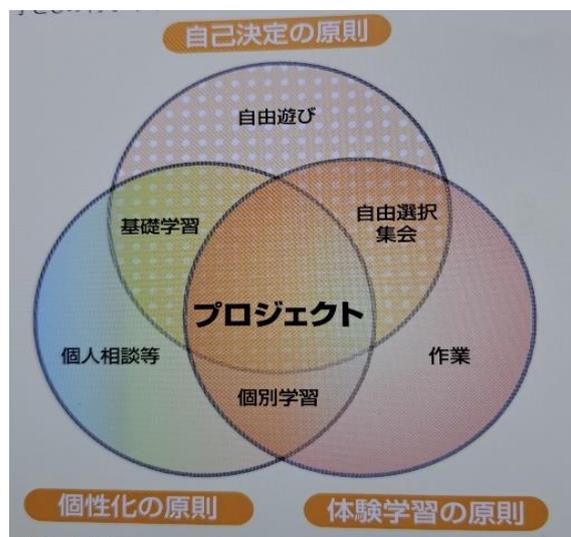
【授業について】

■プロジェクト

3つの原則（自己決定の原則、個性化の原則、体験学習の原則）が調和的に実行され



【掲示板】



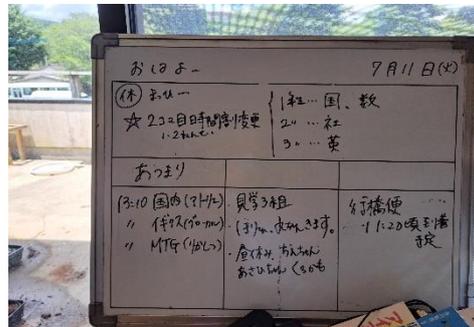
る形態です。

たんなる教科の寄せ集めではありません。有名な教育学者デューイの提唱した「活動的な仕事」に当たります。

小学校は週14時間、中学校では週11時間です（きのくに子どもの村小中学校）。

■自由選択・ミーティング

個別活動よりもグループ活動が中心の時間です。スポーツ、図工、音楽、英会話など、たくさんのメニューから1学期ごとに選びます。小学校は週3回、計6時間、中学校は週2回、計3時間。



ミーティングは、週1回の全校集会のほかに、クラスのミーティングや全寮ミーティングなどが折りにふれて開かれます。犬委員会や遠足委員会などの仕事もあります。ミーティングは自由学校の成否を左右するカギです。

■基礎学習

抽象的な学習材も使われます。そのぶん体験学習の比率は低くなります。

しかし自己決定と個性化の原則はつらぬかれ、しかもできるだけプロジェクトと結びつけて学習するようにします。小学校では「ことば」と「かず」あわせて7時間です。中学は5教科で12時間あります。



所 感

視察では、子どもたちの生き生きとした活動が直接伝わり、宿題やテストのない教育環境は子どもたちを伸び伸びと活動させているように感じました。

現在、きのくに子どもの村学園の卒業生の子どもたちが入学していることや、卒業生が学園の先生として育っているお話しには好感が持てます。また、各種のおもちゃづくり教室は、子どもの興味をそそり、子どもの村の自己決定・個性化・体験学習を重視したプロジェクトの目玉メニューになっていると思った。

私は、幼少の頃、子供会活動や異年齢集団で、海や山、川でよく遊び、自然体験や生活体験、田んぼや畑の手伝いなど、子どもなりに多くのことを経験して育ちました。

今日では、農業も機械化が進み、家族で農業をすることもなくなり、家の手伝いも少なくなるなど、子どもたちも貴重な体験が思うようにできない環境になっております。

今回の視察訪問で、私の幼少時代は家の手伝いをはじめ、多様な体験をしたことが蘇り、私の人生に大きく影響していたことを痛感しました。

いずれにしても、視察訪問するだけの値する学校であると感じました。現在の子どもたちを取り巻く教育環境を解決するヒントが多くあると学校でもあります。

今回の視察研修を通じて得た事柄を今後の公教育のあり方を元教育者の一人として、また、議員として、どのように考え、取り組んで行くことが重要であるか、さらなる学習を深め、より効果的な教育のあり方を模索してまいりたいと思います。